

BOOK REVIEW 1

錯覚の世界 古典からCG画像まで

ジャック・ニニオ著，鈴木光太郎・向井智子訳
新曜社 ISBN 4-7885-0888-5 2004年発行

評者：伊藤暢章（東京大学）

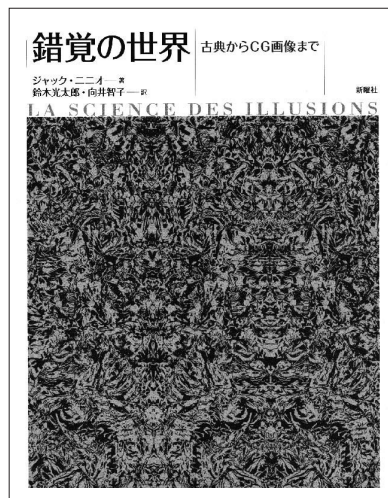
ステレオグラムの本が売れているらしい。

ひとりのブームは過ぎ去りつつある気配もあるが、今でも少し大きめの街の書店に出かけると、各社から出版された様々なステレオグラムが載った本が平積みになっている様を見ることができる。視覚心理学の成果の一端が世間に浸透した証拠であると言えるが、同様の「功績」を上げたものとして双壁をなすものに錯覚（錯視）の本が挙げられる。

ためしにアマゾンにて「錯覚」で検索したところ、80冊超の書籍がヒットした。もちろん、「錯覚」という言葉は日常よく用いられるものであるため、その全てがいわゆる錯視図形を集めた本とは言えないだろう。しかし、ざっくりと眺めたところ、ほぼその半数が錯視図形を扱ったものであった。これがアマゾンコムであれば検索結果はなんと2600件にもものぼる。錯覚とは、いわば、現実世界の隙から立上る虚構の脳内構築であると言えるが、このような小難しい理屈はともかく、ないものが見えた、ダメされたと感じる現象＝

錯覚の存在は現前しており、こういった書籍は眺めているだけで楽しい。人々の心を虜にするのは頷ける。

このように売れ筋である錯覚本業界へと昨年新たにやってきた参入者が、この「錯覚の世界」であり、御多分に漏れず多くの人々の関心を惹いている。本書では様々な錯覚を単純に羅列するだけではなく、対比と同化(6章)、体制化(7章)、完結化と創造(8章)、順応(9章)、恒常性(10章)などの面から分類している。著者のジャック・ニニオは高名な生物学者であるが、錯覚の分野にもかなり造詣が深いらしく、この分類方法は妥当なものに感じられた。図版の多い書籍である以上、必然的に視覚的錯覚（錯視）に文章の多くをさいてあるが、聴覚的錯覚、触覚的錯覚、記憶の錯覚、果てはマジックにおける錯覚にいたるまで言及されている。



文章は、訳者の言葉を借りると「フランス風のオシャレたスタイルで」書かれており、巷の学術書とは趣向が大いに異なるため、その評価については意見が分かれると思われる。エスプリの効いた文章を楽しくすらすら読むことができる人もいるであろうし、文章から滲み出る謎かけの難解さに思わず放り出してしまう人もいるであろう。個人的には初読の際、文章が発散的でとらえどころがなく読みにくいと感じた。

しかしながら、不幸にも同様な感想を持った読者にも、まず全ての図版を通覧して見てほしい。帯にもあるとおり、「よくもこれだけ集めたものだ！」と感嘆すること必至である。しかもそれらのほとんどは、一般的な視覚の解説書でよく見かける本質のみを純粋に提示することに腐心した味も素っ気もない図形ではなく、古典より引用された趣深い絵柄であったり、錯覚が効果的に発揮される（驚異的なほど精密な製版による）精緻な幾何学図形であったりするのである。このような体験をしたのちに、興味をひいた図版の掲載さ

れた章をつまみぐいしていくと、先ほどの難解と思われた文章がすんなりと頭にはいつてくることであろう。まさにここで、表舞台と裏舞台が転換したような「錯覚」を覚えることができる。

錯覚の生まれるメカニズムについていくつか科学的説明も見られるが、「これが正解です」という押しつけがましいところはない。むしろ「このような説明もありますがあなたはどのように考えますか」と読者に解釈をゆだねている面が強い。錯覚の仕組みを詳述した科学書というよりは、錯覚の世界を自らの力で冒険するためのガイドブックと言えよう。思わず没頭してしまう魅惑的な図版と知的好奇心をくすぐる文章を兼ね備えた書籍として、ぜひとも書架においておきたい1冊である。